第５章

ユニ★スポ体験での児童の意識変容調査

1. チャレンジ！ユニ★スポについて

「チャレンジ！ユニ★スポ」とは、“健常者と障害者の相互理解促進”や“共生社会実現への貢献”を目的に、“静岡県内の特別支援学級がある小・中学校の児童・生徒・教員”を対象に障害者スポーツ『ボッチャ』をユニバーサルなスポーツ教材と位置づけた体験授業で、当財団が（公財）静岡県障害者スポーツ協会（以下、「県協会」）、筑波大学体育系齊藤まゆみ教授の協力や指導を得て 2019 年より実施している事業である。2019 年度にケーススタディーとして開始し、2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大で継続開催が危ぶまれたものの 12 の小学校を対象に実施でき、ボッチャ体験を通じた障害者への理解促進やスポーツが苦手な人に対する有用性などが確認できた。そして 2022 年度より“静岡県内の全ての小・中学校”に対象を拡大し、継続して事業を展開している。今年度は、これまでの調査方式に加え 2020 年に参加校の追跡調査を実施した。

「チャレンジ！ユニ★スポ」実施にあたっては、県からのガイドラインを基本に、県協会、講師担当の障がい者スポーツ指導員や開催校の教員から提示された現場視点での感染防止のアイデアを順次取り入れた。さらに、教員から出された「用具がない」「予算がない」「専門の知識がない」というニーズに対し、2021 年度開催校より体験会終了後にボッチャセットを各校に寄贈することで、どのような成果があるのかを調査していく。

本事業には、今年度も県協会の多大な協力を得て実施した。また、開催にあたって多岐にわたりご協力をいただいた静岡県、静岡県障害者スポーツ指導者協議会および指導員の皆様、当財団障害者スポーツ・プロジェクトメンバー、そして本活動にご理解ご協力いただいた静岡県内の学校関係者の皆様にお礼申し上げたい。

2. プログラムの特徴

本事業ではボッチャ体験会に加え、①障害者スポーツに関する知識の提供（学習機会）、②スポーツが苦手な人に対するスポーツの有用性、価値への理解浸透、意識変革、③スポーツ普及を通じた障害者への理解促進、偏見などの減少、④社会的価値の醸成（学術的価値）を有するプログラムとしている。

3. 調査目的

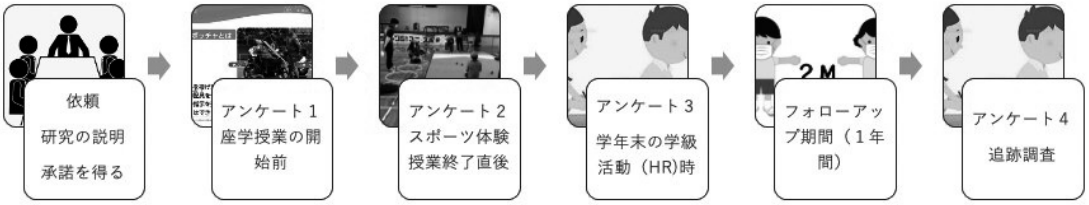
本調査は、2020 年度より順次施行された学習指導要領の理念を実現し、スポーツを通した共生社会実現に寄与する教育内容検討のための基礎資料を得ることを目的としている。この学習指導要領にはパラリンピック教育が明示され、児童生徒の意識のみならず多様な行動変容につながるような教育の推進が期待される。そこで「チャレンジ！ユニ★スポ」の教育内

容で子どもたちの意識や行動がどのように変容するのかを、アダプテッド・センシティブ尺度（齊藤ら,2021）を用いて調査した。

4. 調査方法

2020 年度に参加した 4 年生児童に対する 1 年経過後（5年生）の追跡調査という位置づけで調査を行った。

調査の手続きとして、2020 年度に参加校において説明と依頼をし承諾を得た。次に事前学習前の意識調査（アンケート 1）を実施した。事前調査実施後に各校において座学での授業を事前学習として実施した。その後ボッチャを教材とした体験学習を実施し、体験学習終了時に意識調査（アンケート 2）を行った。さらに、体験学習の数か月経過後に意識調査（アンケート 3）を実施し、全体の傾向と学校別の分析とフィードバックを実施した。そして、追跡調査としての意識調査（アンケート4）を 2021 年度に実施した。



調査の流れ（2020 年度および 2022 年度に実施）

4. 1. 対象者

「チャレンジ！ユニ★スポ」に応募し、調査協力の同意を得た静岡県内 12 校の児童生徒のうち、1 年後の追跡調査に協力が得られた 10 校 401 名が調査対象である。

4. 2. アンケート調査

アンケートは、「事前学習前（アンケート 1）」 用、「体験会参加直後（アンケート 2）」 用、「体験会から 2～3か月経過後（アンケート 3） 」「1 年後」 用の4種類であるが、いずれも共通する調査項目を設定している（図表 5−1）。同一対象者へ期間中に4 回の回答を依頼した（調査用紙は巻末資料参照）。

アンケート実施にあたっては、以下について補足説明を加えた。

・アンケートへの協力は強制でなく任意である。

・回答者コードは、外部には回答者を特定できない配慮を加えた個別識別コード設定となっており、児童自身で設定する仕組みである。記入は児童の意思を尊重するが、可能な範囲で協力して欲しい。

・調査結果発表時に回答者個人を特定する情報は一切含まれない。

・「必ず3つ選んでください」と指示している一部の設問では、児童からの質問が想定される。例えば、「2つしか該当項目がない。全てが当てはまる。どれも当てはまらない」などである。その場合は「自分の気持ちに近い順に上から3つ選んで○を」という回答を教師に依頼した。

図表 5-1 調査項目と実施時期

質問項目	事前	直後	数か月後	1 年後
障害のある人との距離感	○	○	○	
東京 2020 オリンピック・パラリンピックへの興味	○			
知っている障害者スポーツ種目	○			
ボッチャの感想		○		
障害イメージ	○	○	○	○
障害者スポーツイメージ	○	○	○	○
アダプテッドの考え方	○	○	○	○
アダプテッドの実践力	○	○	○	○

○は実施項目

4.3 事前学習

事前学習は、国際パラリンピック委員会の公認教材である『I' mPOSSIBLE（アイムポッシブル）』日本版を用いた。教材についてはスライド、ワークシート、動画を提供し、協力校に実施を依頼した。なお、教材はいずれも TOKYO 2020 for KIDS ウエブサイト（https://education.tokyo2020.org/jp/）の東京 2020 教育プログラムからダウンロード可能であった。

*現在は日本パラリンピック委員会サイトより改訂版のダウンロードが可能（https://www.parasports.or.jp/paralympic/iampossible/）

図表 5-2　事前学習で使用したスライド

スライド
①『パラリンピックってなんだろう？』　（必須）
②『ボッチャをやってみよう』（必須）
P13までを座学にて依頼　P14以降は体験会にて説明
③「公平について考えてみよう」（任意）
④「東京2020パラリンピックを楽しもう」（任意）

図表 5-3　事前学習で使用した動画

動画
①「リオ 2016 パラリンピックダイジェスト（3 分 34 秒）」（必須）
②「ボッチャ競技説明（2 分 38 秒）」（任意）
③「ボッチャをやってみよう 5 分 10 秒）」（必須）
④「（教員用）ボッチャ授業の進め方（4 分 53 秒）」（参考）

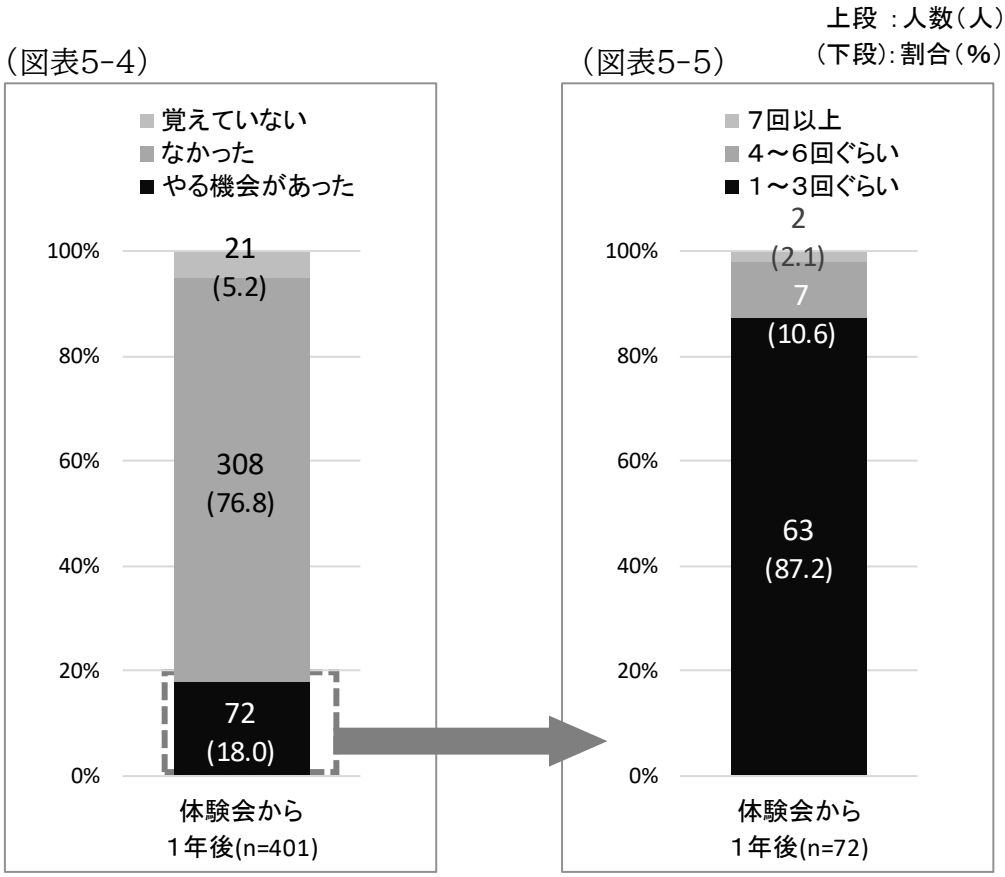
4.4 結果の概要

期間中に実施した4回のアンケートから、回答者コードで紐づけられた 401 組のデータを分析対象とした。結果の概要は以下の通りである。

ボッチャをする機会

ユニスポ体験学習のあとに、ボッチャ体験をする機会があったかどうかについて「やる機会があった」「なかった」「覚えていない」より回答してもらった。また、実際の実施状況についても合わせて回答してもらったところ、1～3 回が 87%以上となっており、日常的に実施できる環境ではないことが示された。図表 5-4～5 はその結果を示したものである。

図表 5-4【体験会から1年後】ボッチャ体験会のあと、ボッチャをやる機会があったか
図表 5-5【体験会から1年後】やる機会があった人は、何回ぐらいやりましたか

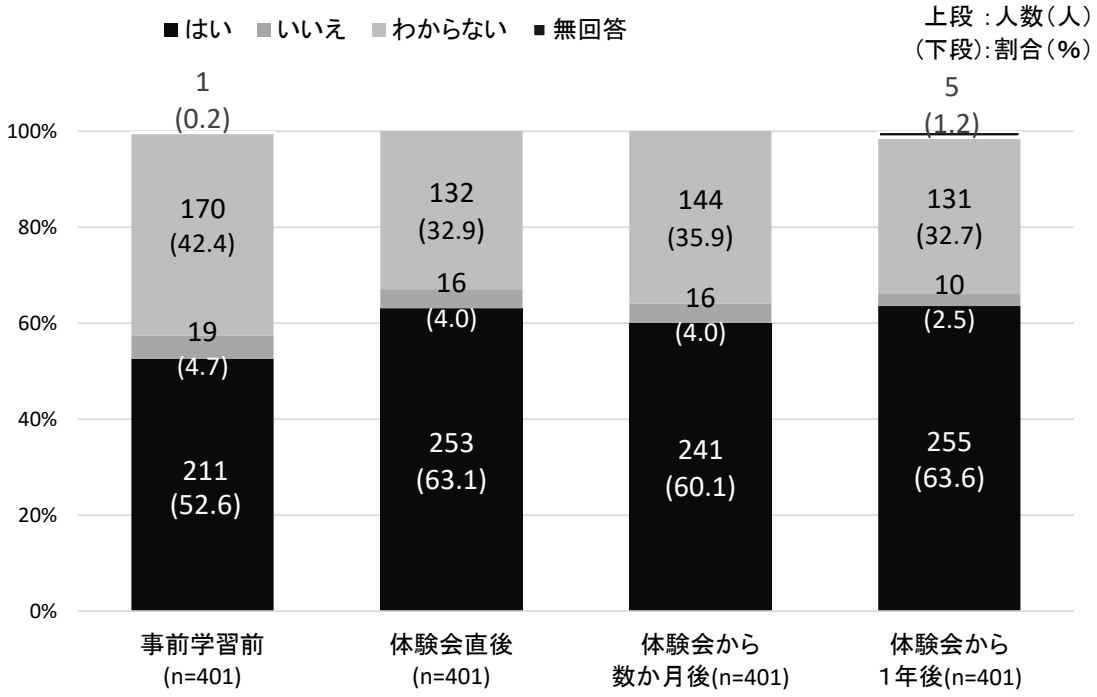


4.4.1. 障害のある人との距離感

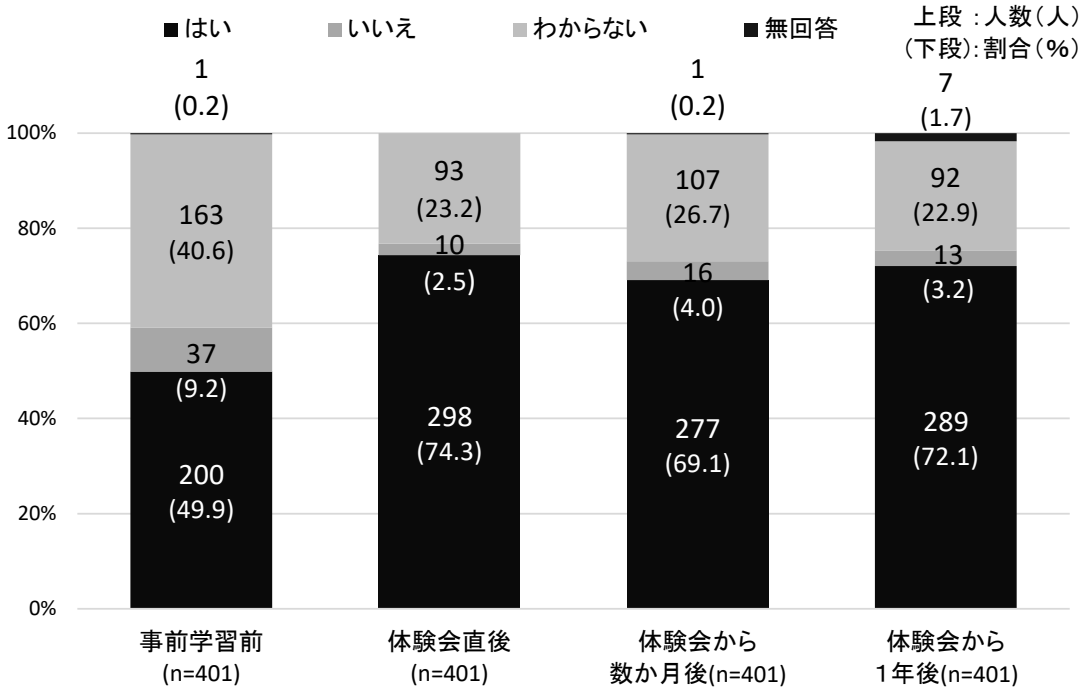
2020 年度に実施したものと同じ項目である「障害のある人と仲良くできる？」「障害のある人と一緒にスポーツできる？」「一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？」という 3 つの質問に「はい」「いいえ」「わからない」で回答してもらった。図表 5-6～8 はその結果を示したものである。

いずれの項目とも、体験会から数か月後の状態が維持されていることが確認できた。次にボッチャをする機会の有無で比較したところ、経験ありの方が「はい」と答える割合が高いことが示された。つまり、ユニスポ体験学習がその後の児童の意識や行動変容に影響を与えていることが示唆された。

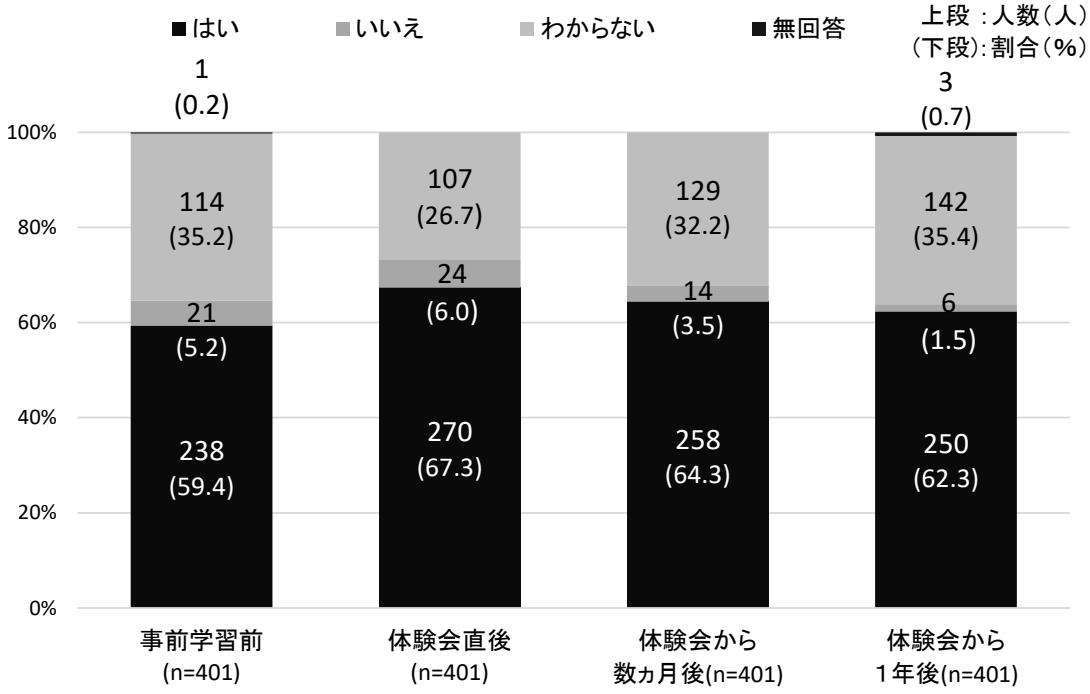
図表 5-6 障害のある人と仲良くできる?



図表 5-7 障害のある人と一緒にスポーツできる?



図表 5-8 一緒にスポーツすれば障害のある人と友達になれそう？

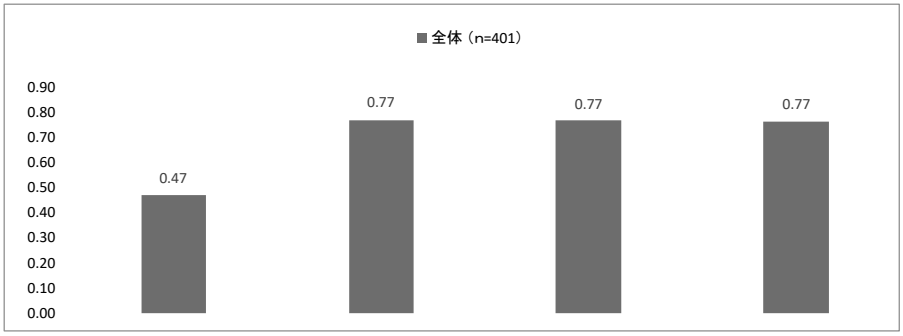


4.4.2. 障害イメージ

障害者に対してどのようなイメージを持っているかを把握するために、「障害」から連想する用語として「困っている、個性的、手伝いが必要、不便なことがある、その人らしさ、リハビリ、自由に動けない、できることがある、車いす」の選択肢から 3 つを選択してもらい、3 回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(0.47±0.87)に比べ体験会直後(0.77±0.89)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(0.77±0.90)、1 年後(0.77±0.91)まで継続することが示された(図 5-9)。

次に、体験会終了後から 1 年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが 0.97 と実施していない児童の 0.72 に比べ有意に高いことが示された。つまり、体験で止まるのではなく継続することで障害に対するポジティブイメージが醸成されていくことが示唆された(図 5-13)。

図表 5-9 障害イメージ



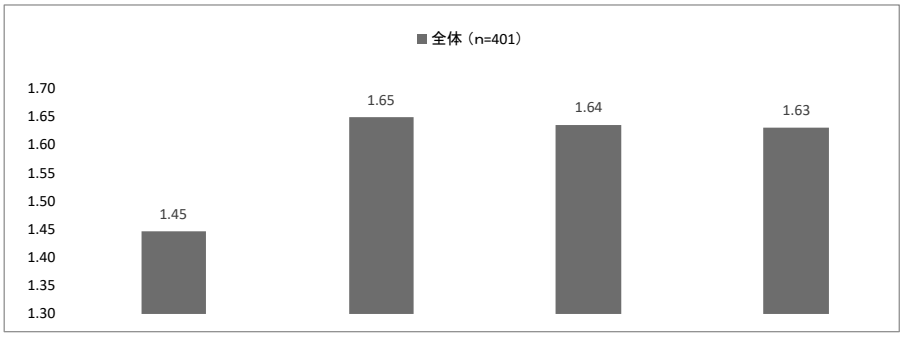
	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体（n=401）	0.47（±0.87）	0.77（±0.89）	0.77（±0.90）	0.77（±0.91）

4.4.3. 障害者スポーツイメージ

障害者スポーツから連想するイメージについて、「楽しそう、大変そう、チャレンジしてみたい、不便、激しい、障害者のためのもの」という選択肢より 3 つを選択してもらい、3 回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。数値はポジティブなイメージが高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(1.45±0.77)に比べ体験会直後(1.65±0.67)にポジティブなイメージ変化があり、その傾向が数か月後(1.64±0.71)、1 年後(1.63±0.69)まで継続することが示された(図 5-10)。

次に、体験会終了後から 1 年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが 1.79 と実施していない児童の 1.64 に比べ有意に高いことが示され、障害に対するポジティブイメージ同様に、障害者スポーツのポジティブイメージも醸成されていくことが示唆された(図 5-13)。

図表 5-10 障害者スポーツイメージ



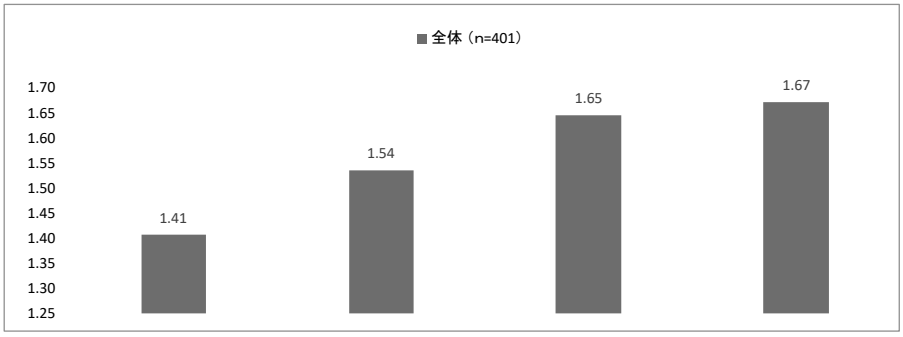
	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体（n=401）	1.45（±0.77）	1.65（±0.67）	1.64（±0.71）	1.63（±0.69）

4.4.4. アダプテッドの考え方

障害のある友達とスポーツをするために必要なものとして、「障害者スポーツに詳しい先生やコーチ、スポーツのルールを変えること、障害者スポーツの本や資料、障害のある友達と相談すること、障害者スポーツ専用の道具や場所、サポートすること」という選択肢より 3 つを選択してもらい、3 回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。自らが主体的に関わっていこうとする意識をアダプテッドの自発性と捉え、数値は自発性が高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(1.41±0.68)、体験会直後(1.54±0.70)、数か月後(1.65±0.72)、1 年後(1.67±0.73)と高くなることが示された(図 5-11)。

次に、体験会終了後から 1 年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが 1.68 であり、実施していない児童 1.64 との間に差がないことが示された(図 5-13)。

図表 5-11 アダプテッドの考え方(スポーツをするために必要なもの)



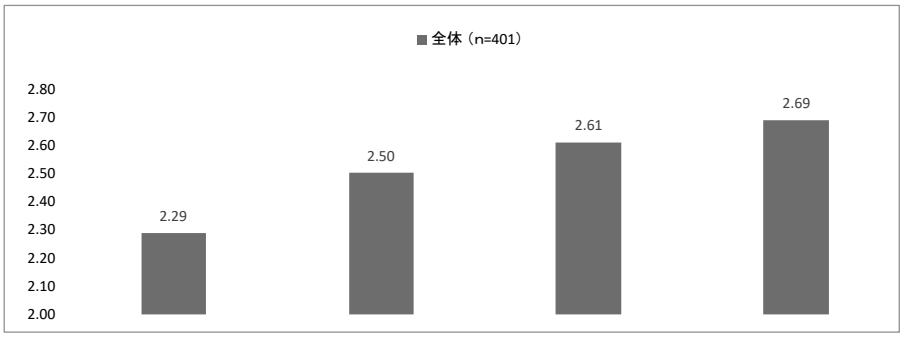
	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体 (n=401)	1.41 (±0.68)	1.54 (±0.70)	1.65 (±0.72)	1.67 (±0.73)

4.4.5. アダプテッドの実践力

障害のある友達とスポーツを楽しむために必要だと思うことを、体育授業での場面設定をもとに「友だちがうまくなるように練習をがんばってもらう、友だちも楽しめるようにルールを変える、あまりボールを渡さないようにしてあげる、みんなが車いすにのって車いすバスケットボールをする、無理をさせず得点係や応援で頑張ってもらう、ボールを使いやすいものに変える」という選択肢から 3 つを選んでもらい、3回の変化を見た。回答者ごとに選択肢の組み合わせをもとに得点化したのち、平均値と標準偏差をもとに比較検討した。一緒に楽しむための配慮や工夫を必要な場面で適用しようとする意識をアダプテッドの適用度と捉え、数値は適用度が高い方から 3,2,1,0 となる。その結果、事前学習前(2.29±0.68)、体験会直後(2.50±0.63)、数か月後(2.61±0.57)、1 年後(2.69±0.54)と高くなることが示された(図 5-12)。

次に、体験会終了後から 1 年後の調査までの間にボッチャ等を継続して実施した児童とそうでない児童で比較したところ、実施した児童の平均スコアが 2.72 であり、実施していない児童 2.68 との間に差がないことが示された(図 5-13)。

図表 5-12 アダプテッドの実践力(車いすバスケットを楽しむために必要なもの)

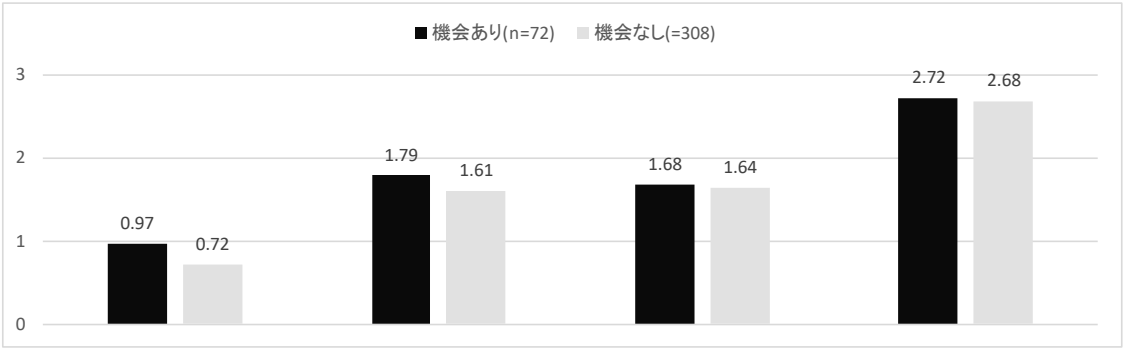


	①事前学習前	②体験会直後	③体験会から数か月後	④1年後
障害イメージ				
全体 (n=401)	2.29 (±0.68)	2.50 (±0.63)	2.61 (±0.57)	2.69 (±0.54)

これらの結果から、一連の学習内容が、児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。また、障害のある友だちとスポーツをするために自ら主体的に関わっていこうとする意識の醸成や必要な場面でアダプテッドを適用しようとする意識があることも明らかとなった。また、その意識は 1 年後も継続していることが示された。以上のことから、ユニ

バーサル・スポーツを教材とした体験会を軸とする教育内容は、児童生徒の意識変化に影響すると考えられた。

図表 5-13 ボッチャを継続してやる機会の有無別の平均スコア



5. 今後の課題

本調査を実施するにあたっては学校関係者の協力が不可欠である。事前学習では、教師が配布された教材をもとに展開することから教師の教材観や扱い方も重要な要素である。1年後の追跡調査からは、継続して実施することで児童の障害イメージや障害者スポーツのポジティブイメージが醸成されることが示されたが、体育やスポーツ場面におけるアダプテッドへの意識や実践力については、差がないことも示された。「チャレンジ！ユニ★スポ」は、多くの小学校では総合的な学習の時間の福祉単元として実施されていることから、単発的な扱いにならざるを得ない。アダプテッドの意識が定着するためには年間計画に組み込まれていくことが必要であり、障害者スポーツ指導員による「出前授業・出前講座」から各校の教員による「自前授業・自前体験会」が展開できるよう、教員対象の研修も同時に進めていくことが求められる。

昨年度の調査で用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因として示されたことから、体験会後に当該校へ用具を提供し、その後の活用状況についても調査している。また、当財団が全国を対象に実施している「スポーツ教材の提供」で、ボッチャ用具を提供した複数の学校より興味深い実践報告が得られたので、活用事例として次項で報告する。

6. まとめ

本調査からは前年度と同様に、事前学習、体験、振り返りという一連の学習内容が児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。さらに、1年後の追跡調査からも児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。

「チャレンジ！ユニ★スポ」で実施しているボッチャを教材とした授業が、スポーツを通した共生社会の実現という教育目標に合致し、児童生徒の意識変容を促進する可能性も示唆された。

本調査にご協力いただいた児童生徒の皆さん、事業の実施にご協力いただいた学校関係者ならびに、静岡県障害者スポーツ協会に御礼申し上げます。

（齊藤まゆみ）

■ボッチャの展開事例紹介

ヤマハ発動機スポーツ振興財団では、スポーツに親しむ機会を増やすことで、心身ともに健全な子どもたちを育成することを目的に、「子どもたちがスポーツを楽しみ、好きになるような取り組み」を計画している団体に対してスポーツ教材を毎年提供している。

2021 年度は、応募のあった団体から抽選で 120 団体に対し、ボッチャボールセット(60 団体:対象は中学生以下)あるいは、タグラグビーセット(60 団体:対象は小学生以下)を提供した。そして、年度末に提供先団体より教材活用実績を報告いただいた。

本項では、ボッチャをユニバーサルなスポーツとして体験授業を実施された団体より、その展開方法(狙いや工夫、効果など)についてお話を聞かせていただいたのでご紹介させていただく。ボッチャを使った体験会等を計画されている皆様の参考としていただければ幸いである。

訪問校の概要

1)山形県立山形養護学校

病弱虚弱の児童生徒が学ぶ特別支援学校。病弱だからできない、ではなく、病弱でもできたという満足感を一人でも多く味わってほしいと思いボッチャに取り組み、子どもたちの状況を考慮してプログラムを工夫。普段、気持ちを表にあまり出さない生徒もハイタッチをするなど気持ちを表したり、ボッチャに参加することを励みに登校する生徒も出てきた。

2)埼玉県　久喜市立本町小学校

全校児童数 270 名程(特別支援学級含む)の小学校。生涯スポーツへの誘いという旗の下に児童も教員もそして地域コミュニティも巻き込み、ある資源をフル活用しながら学校教育を進めている。本町小学校地区コミュニティ協議会と実施した「ボッチャ交流会」では、個々の児童に応じた学びが得られたとのことで、今後も継続的取り組みを予定されている。

3)高知県　中土佐町立上ノ加江小学校

高齢化地域に位置する生徒数30名弱の小学校。町内の社会福祉協議会や地域活動支援センターに集う障害者との協働でふれあい体験会の開催、障害理解と地域交流を促進。誰もが楽しめるスポーツであることを知ったことにより、雨の日の休み時間では、中学年を中心にボッチャで楽しむ姿が見られるようになっている。

「交流及び共同学習を楽しもう」～病弱の特別支援学校。ボッチャが登校する励みに！～

実地調査　山形県立山形養護学校　2022 年 11 月 4 日（金）15：20～17：00
面接対応者　古原常能 教頭　　門馬達也 教諭（小学部担当）
新関日春望 教諭（中学部担当）　大泉麻実 講師（高等部担当）
面接者　藤田紀昭（日本福祉大学　スポーツ科学部　教授）
　　大庭義隆（公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団）

今回の実地調査の目的はボッチャボールを贈呈した学校がどのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。

贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、小学部、中学部、高等部それぞれの活動でボッチャを取り入れるなど学校全体で取り組んでいること、また、その結果「ボッチャの学習に参加することを励みに登校する生徒がいた」「教師と一緒に取り組むことでルールを正確に理解し、自信をもって審判ができるようになった」「普段、気持ちを表にあまり出さない生徒もハイタッチをするなど気持ちを表していた」などの多様な効果がみられていたことが書かれていたことから、実際の取り組みを知るために実地調査をさせていただくことにした。

【学校の特色】

山形養護学校は病弱教育の特別支援学校であり、隣接する山形病院と連携して教育を進めている。現在、山形病院に入院して教育を受けている児童生徒はいない。小学部 13 名、中学部 9 名、高等部 16 名計 38 人が在籍している。学級は計 16 学級あり、教育課程は単一障がい学級、重複障がい学級、訪問教育の 3 種類である。てんかんや筋ジストロフィーなど、慢性疾患に対応した学校であるが、20 年ほど前からは精神疾患のある子どもや重度・重複障がいのある児童生徒の割合が高くなってきている。部活動は実施していない。

【ボッチャボールを使っての活動】（古原教頭のお話）

県から障害者スポーツ関連の用具が配布されるが、ボッチャの道具はなかった。そのためヤマハ発動機スポーツ振興財団のボッチャ用具頒布事業に応募した。ボッチャボールが届く以前から当校では教員手作りのボールを使ってボッチャを体験する授業を実施していた。

ボッチャには単一障がい学級、および重複障がい学級の子どもたちが主に参加していた。小学部では「あそび」の位置づけで実施、中学部では保健体育、および、総合的な学習の時

間に実施し、高等部では体育や自立活動の時間で実施した。いずれも授業の中での実施であった。

当初は近隣の小中学校とボッチャを通しての交流なども構想していたが、コロナ感染拡大の影響により実施できず、校内での交流にとどまっている。

「ボッチャはルールがシンプルでありながら戦術面では奥深い。実施する子どもの実態に応じてルールを変えて楽しめるところがよいと考えている。例えば知的障害のある子どもであればジャックボールに近づけられれば楽しいし、知的障害のない子どもであれば、作戦、戦術を考える楽しさがある。重い肢体不自由の子どもであってもランプなどを使って参加することができる。（自分で投げられない子どもが使うランプは教員が段ボールなどで製作した。）このように、どのような子どもであっても参加できる点がボッチャの利点である。

活動の中では子どもたちの良かったところを教員が評価し、褒める。そうすると子どもたちもうれしくなり、ボッチャをまたやりたくなるという好循環がみられた。欠席しがちな子ども、体を動かすのが好きではない子どもも、ボッチャの時には登校し、楽しんでいた。昨年度はパラリンピックもあり、日本チームの成績もメダルを取るなど活躍したことからその分、子どもたちの関心は強くなったと思われる。また誰しもこれまで経験したことがないスポーツでみんな同じスタートラインに立てたことも良かった。

【各学部での取り組み・子どもたちの変化】（門馬先生、新関先生、大泉先生のお話）

小学部

単一障がい学級と重複学級の児童 4 人が参加した。初めにボッチャやパラリンピックに関する情報などを子どもたちに伝え、ボッチャに対する関心を高めた。その後、実際にボッチャを体験した。全員でボッチャを楽しむことができるようルールを単純化させるなど工夫して実施した。具体的には的あてゲーム的な内容で手作りの的（写真参照）を使ってみんなで楽しんだ。

集団の中での活動が苦手な児童もいたが参加できた。そのことがみんなでできるきっかけになった。後半では「ナイス！」や「ドンマイ！」といった声掛けもできるようになった。

得点（数字）の数え方など、算数の内容を盛り込んで実施することができた。二人一組で実施したため、勝っても負けても個々人のプレーの結果とならなかったことも良かった。

一昨年までは、教員が手作りしたボールでボッチャを体験していた。本物のボッチャボールで活動できるようになり本当に良かった。

中学部

男子2名（単一障がい学級）で実施した。総合的な学習の時間にボッチャのことを動画で勉強すると関心が高まった。動画で見た技を自分たちもやってみたいと思うようになり、モチベーションが上がった。教師と生徒が二人で1チームとなりペア戦でゲームを実施した。生徒と教師で話し合い、作戦を考えながらゲームを進めた。コートの中に入って作戦会議ができるのも良かった。授業が進むにつれ、だんだんと生徒が主体的に作戦を考えるようになってきた。最初のころは、勝った負けただけに関心が集まっていたが、後半はお互いの作戦を評価できるようになってきた。さらに、審判もできるようになった。

今年は運動会でもボッチャを実施した。その際、保護者が、様々な方法で参加できることを知り、ボッチャに興味を持つようになった。

高等部

単一障がい学級の生徒も重複障がいの生徒も、体育と自立活動でボッチャを実施した。まず、動画でボッチャを学んだ。パラリンピックのテレビ放送なども視聴して興味を高め、その後ボールを使って実際の活動に入った。

発達障害のある生徒は勝ち負けに左右され、こだわりやすいこともあるが、生徒同士で作戦を考える時間を設定することで、徐々にコミュニケーションが取れるようになり、負けても笑顔で終われるようになった。いつもは活動に参加しない生徒も、ボッチャのボールを投げることは好きな様子で参加してくれた。ボッチャはジャックボールに近づけるというルールのわかりやすさが魅力であり、どの生徒も参加しやすいのではないかと感じた。

【ボッチャのいいところ】

ボッチャはやりやすい。競技を始めるのに特別な技術を身につける必要がなく、簡単にみんながスタートラインにつくことができ、だれでも参加できる。点数を数えるところは算数の内容につながり、コミュニケーションを取りやすい点も良いところだと思う。（門馬先生）

去年よりも作戦面で進歩が見られた。みんな取り組みやすい。他の球技と違って、体力がない生徒でも立ってじっくり考えることができるのでボールに触れている時間が長く、生徒にとって参加している実感があるのではないかと思う。ルールも簡単で取り組みやすい。（新関先生）

ボッチャはプレーするのに特別な技術が必要なわけではなく、だれでも投げられること、チ

ーム戦ではあるが、それぞれの生徒が投げる時間が確保され焦らず投げられること、あの人はできるが自分はできないというような気持ちにならずにすむことなどから、発達障害のある生徒にも取り組みやすいのではないだろうか。今年は自立活動で実施している。新しいことに取り組むのが難しい生徒も安心して取り組める。（大泉先生）

【今後の取り組みについて】

様々な実態の子ども同士が、一緒に参加できるような工夫ができるといいなと思う。（門馬先生）

重複障がい学級で障害の重い生徒が、もっと活動する方法を考えてみたい。（新関先生）

継続してパラスポーツに取り組んでいきたい。継続することで、生徒同士で学び合いができるようになるといいと思う。（大泉先生）

【学校を訪問しての感想】

教頭先生、ボッチャを担当した門馬先生、新関先生、大泉先生それぞれ非常に熱心な取り組みをされていることが言葉の節々から伝わってきた。また、子どもたちが少しでも成長するように、様々な工夫をされていることがわかった。教材としてのボッチャの特徴、利点をよく考えておられ、教材研究の深さに感心すると同時にそんな先生に指導してもらっている児童生徒さんたちは幸せだなと思った。

新関先生は特にボッチャに詳しく、お伺いしたところ、大学時代は日本ボッチャ協会、元日本代表監督の村上さんのゼミにいらしたということだった。

なかなか公費で買うことができない高額なボッチャボールがもらえることに感謝してくださっていると同時に、4 人の先生ともボールを大切に使っておられることがわかり、とてもうれしく感じた。

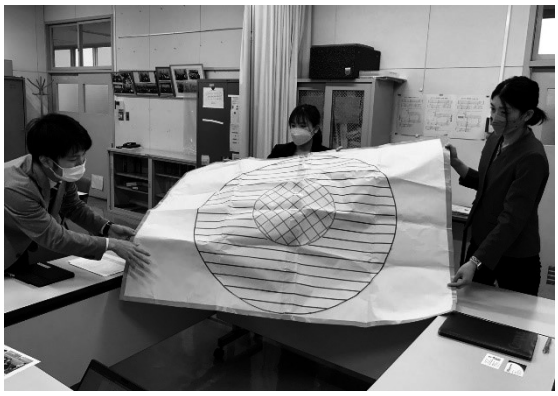
先生方のお話を聞く中で筆者自身これまで気が付かなかったボッチャの特性や良いところがわかりとても勉強になった。これからも様々な工夫をして、子どもたちに楽しい経験と成長のきっかけをたくさん届けてほしいと思った。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。

（藤田紀昭）

山形県立山形養護学校の皆様（左より古原教頭、門馬先生、新関先生、大泉先生）

ボッチャのゲームの様子を写真や動画に撮影し校内で紹介。児童生徒や先生だけでなく、学校祭週間で来校する保護者も視聴できるコーナーを設置。



小学部では、知的障害のある子どもを考慮してルールを単純化。的あてゲーム的な内容とした手作りの的を作成、あわせて得点（数字）の数え方の学習を実施。

中等部：最初は勝った、負けただけに関心が集まっていたが、後半は作戦を評価できるようになり、審判もできるようになった

高等部：ボッチャの学習に参加することを励みに登校する生徒も。

「ボッチャ」を軸とした授業と地域交流で、児童へスポーツの意欲や関心を高める

実地調査　久喜市立本町小学校　2022 年 11 月 7 日(月)13:30～14:45
面接対応者　大森正樹 校長　 栗城　遥 教務主任
面接者　齊藤まゆみ(筑波大学体育系　教授)
　　大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

今回の実地調査の目的はボッチャボールを贈呈した学校が、どのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。

贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、①4年生の福祉の学習では、「体験を通して、ボッチャが障害の有無や性別、年齢を超えて幅広く親しめるスポーツであることに気づくことができた。加えて、体が不自由な人でも、驚くような素晴らしいプレーができるなど、体の不自由な人への見方が変わった。」また、②地域との交流行事では、「ボッチャを介することでよりスムーズにコミュニケーションを取ることができ、絆が深まった。」さらに、③特別支援学級においては、「ルールの理解が深まると共に投球の技能が高まり、スポーツへの関心意欲が高まった。」などの多様な効果がみられていたことが書かれていたことから、実際の取り組みを知るために実地調査をさせていただくことにした。

【学校の特色】

久喜市立本町小学校は、全校児童 274 名、1学年が 1～2 学級と特別支援学級(知的、自閉・情緒)が 2 学級である。校内テーマとして「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するための小学校体育」を掲げており、児童に「多様なスポーツへの関わりや親しみ」を培うことに創意工夫を凝らしている。また、地域コミュニティとの連携が特徴であり、特に本町小学校地区コミュニティ協議会とは「子ども祭り」「昔遊びのお手伝い」「防災訓練」「除草・樹木の剪定作業」など多様な関わりを持っている。

【4年生の総合的な学習の時間(福祉領域)】

4年生の総合的な学習の時間(福祉領域)でボッチャを活用できるのではないか、また「生涯スポーツ」の切り口としてボッチャが活用できると思ったことから、ヤマハ発動機スポーツ振興財団のボッチャ用具頒布事業に応募した。ボッチャボールが届く以前は、校内にはボッチャはなく、また予算化という面で購入には難しさがあった。

東京オリンピック・パラリンピックの時期でもあり、ボッチャの認知度も高まってきた。授業を担当した栗城先生も本企画以前はボッチャの経験がなく、夏休みに職員レクリエーションでボッチャを体験、児童がただ楽しむだけでなく、どの程度までルールを噛み砕きながらやれば良いかなども考えながら実施した。福祉の単元としてボッチャを用いることから、競技のルールをそのまま使用するのではなく、児童の実態に合わせてルール等を変更していくことにした。

総合的な学習の時間（福祉領域）におけるねらいは、ボッチャを軸とし、卓球やシッティングバレーなどのパラスポーツを体験することによって、「できる」というポジティブイメージを引き出すこととした。その理由として、白杖の体験や体の不自由さの体験を軸とした「体の不自由な人を知ろう」という展開では「大変」「かわいそう」という一面的な捉え方になりがちだったことがある。そのため、まず児童がボッチャを行い、スポーツとしての面白さ、何ができるか、技術的な特徴などを体験的に学習した。次に振り返りとして、東京パラリンピック金メダリストの杉村選手の映像を見ることで、杉村選手の握力（5kg）や動きの特性（脳性まひ）とボッチャのパフォーマンスを自身のボッチャ経験に重ね合わせることで、児童の身体障害がある人への見方や捉え方が変わった。一連の授業を経た児童からは、「自分でやると難しい」「体が不自由だとスポーツはできないと思っていた」から「やり方次第で、ルールの工夫次第でこんなスポーツができる」「スポーツを通して楽しんだり、人生の中で楽しいことを見つけることができる」という捉え方の広がりを感じられる反応があった。

ボッチャ体験2時間の授業内変化は、児童のプレースタイルが時間経過とともに変わっていったことである。負けそうな時にジャックアウトを狙う、投球後にチームの児童らが自然とボールの近くに寄って作戦会議をするなどの様子が見られた。また、普段は運動が得意でない児童も、スーパープレーを連発してみんなから拍手をもらったり、その児童がガッツポーズをするなど、自信にもつながる成功体験を感じられる機会になった。

通常の学級においてボッチャを教材とした授業をするには1セットでは足りず、児童の待機時間が増えることから、活動を保障するためにも複数セットあるとありがたい。特別支援学級では、最大で 8 名なので1セットでも対応できる。コートは、ラインテープを貼るのではなく、コーンやマーカーを置くことで簡易化した形で実施した。

【地域との交流行事】

本町小学校には、本町小地区コミュニティ協議会（通称：コミュ協）という地域組織があり、小学校と有機的な連携のもとに様々な交流をしている。特に「本町小まつり」は本町小地区コ

ミュニティ協議会主催の小学校体育館を会場とした行事で、毎年9月の第2日曜に開催してきた。射的やビンゴ、ストラックアウトなどのコーナーで遊び、景品も準備されるなど 300 人程度が集まる盛大なお祭りであった。しかしコロナ禍で祭の開催が制限され、コミュニティ活動として何かできるものはないかと探っていた。人数を制限する中でもできるものとして、大森校長がボッチャを提案したところ採用となった。

コロナ対策として参加者を事前登録 50 名程度とし、児童も含めた多様な年代でチームを作る形での「ボッチャ交流会」とした。準備の過程で、コミュニティ協議会が久喜市ボッチャ協会の存在を知り、用具の貸し出しと審判の派遣を受けることができた。交流会では、高齢者から児童まで幅広い年代で構成されるチーム特性、さらには連発するスーパープレーなどでの盛り上がりもあり、交流会後にボッチャの可能性を強く感じたコミュニティ協議会がボッチャセットを2セット購入した。また、参加者の実態に合わせたルールの設定などにも対応できるよう、今年度のボッチャ交流会では自前で審判もやることを計画している。また、近隣のコミュニティからボッチャセットの貸し出し依頼も来ているとのことである。

【特別支援学級】

特別支援学級では、9名の児童が自立活動の中でボッチャを行った。ボッチャは一定の期間継続して行い、教室内にコートテープを貼ったままにした。特別支援学級では、ボッチャを用いることを通して、「ルールを覚える」「仲間と楽しむ体験をする」「点数を数える」「ボッチャを通して自分の得意なこと、他児の得意なことに気づく」という観点から個別の課題を支援することにつながる取り組みになった。結果として、個々の児童に応じた学びが得られた。

【学校を訪問しての感想】

本町小学校は、生涯スポーツへの誘いという旗の下に児童も教員もそして地域コミュニティも巻き込み、ある資源をフル活用しながら学校教育を進めているという印象を強く受けた。大森校長の発言からは、「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するための小学校体育」での活動が、本来想定していた内容から大きく制限されたままになっていることへのもどかしさも伝わってきた。また、栗城教務主任の「コロナ禍なので、体育館を自由に開放したり、用具を自由に使って良いという形にはできていない。」という説明からも、コロナの影響はどの学校も抱える課題であることを再認識した。その中でも、「することを前提にどうしたらできるか」という発想からボッチャを地域交流に活用する提案、それを形にした地域コミュニティとの有機的な連携、結果としてボッチャセットの追加

購入につながったことなど、新たな地域間連携の広がりとつながりを感じさせるものでもあった。そして、エピソードとしてお聞きした「ボッチャを体験したことで、クリスマスプレゼントに『ボッチャセット』を頼むと話していた児童が複数いた」ということからも、ボッチャを軸とした総合的な学習の時間は、児童にとって楽しい活動であったことがうかがわれる。

特別支援学級の児童も積極的にボッチャに向き合ったようである。まだ、通常学級とのボッチャ交流は実施していないとのことなので、今後は交流学級などでもボッチャを軸とした教育活動が展開されることを期待している。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。（齊藤まゆみ）

お話を伺った本町小学校の大森校長先生（左）、栗城教務主任（右）

パラスポーツ体験は、「できる」というポジティブイメージを引き出すことにつながる。運動が苦手の児童にも、自信につながる成功体験を感じられる機会になる。

本町小地区コミュニティ協議会、久喜市ボッチャ協会との連携で開催した交流会。
高齢者から児童までごちゃまぜチームで大いに盛り上がり、次年度も計画中。

「高齢化地域の小規模校。障害者の協力で障害理解と地域交流を促進」

実地調査　高知県中土佐町立上ノ加江小学校　2022 年 11 月 14 日(月)10:15～12:00
面接対応者　　角雅子　校長　　堅田和正　教頭
面接者　藤田紀昭(日本福祉大学　スポーツ科学部　教授)
　　大庭義隆(公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団)

今回の実地調査の目的はボッチャボールを贈呈し学校が、どのようにボールを使い、どのような効果があったのか、どのような工夫をしていたのかを知ることである。

贈呈した各学校に対する事前のアンケート調査から、高齢化の進む中土佐町(人口約 6,164 人、65 歳以上 3,032 人)において、町の社会福祉協議会と連携し、地域活動支援センター「つどい処」(※)に集う障害者からボッチャを教えてもらいながら、障害について学ぶと同時に、地域交流の手段としようとした点が特徴的なことから、実地調査を行った。

※地域活動支援センター「つどい処」

障害がある人を対象として、創作活動、生産活動、地域との交流促進などの機会を提供する支援機関。今回のボッチャ体験にあたっては、この「つどい処」を利用する方で、『ワンチーム(障害理解の啓発を目的に活動をするグループ)』のメンバーが指導された。

【学校の特色】

生徒数 23名(1 年:5人、2 年:3人、3 年:3人、4 年:2人、5 年:5人、6 年:5人)の極小規模校である。体を動かすことが好きな児童は多いが、運動場は狭く(運動場の斜めを使って何とか 50mの直線路ができる程度)思い切りボールを蹴ったり投げたりすることができない環境である(学校が高台のため、ボールがフェンスを越してしまうと下の方まで落ちる)。1・2 年生が一つのクラス、3・4 年生が一つのクラス、5・6 年生が一つのクラスとなった完全複式学級である。

ほとんどの授業は 2 学年が一緒に実施している。体育では陸上や体操などの個人競技の

運動は苦労なく実施できるが、サッカーなどのチームスポーツのゲーム形式での活動は難しく、ソフトバレー、バスケットボールなどを教員も参加する形で実施している。

近年、上ノ加江中学校は閉校となったため、小学校卒業したのち、中学校は隣の地区の久礼中学校にスクールバスで通うことになる。

【ボッチャボールを使っての活動】

中土佐町社会福祉協議会（以下、社協）、地域活動支援センターの方々と連携、協力して、本校の中学年（昨年度の3・4 年生の 7 名）が、ボッチャの行い方を教えていただき、ともに楽しみながら障害者理解を深めることを目的として、総合的な学習の一環として実施した。

社協は中土佐町の小中学校の福祉教育の年間計画の中に、当該小学校と福祉関係組織との交流を位置づけ、計画的に障害者施設や高齢者施設との交流を行っている。

ボッチャは障害の有無に関係なく誰でもできるスポーツで、地域活動支援センターでもすでに取り組んでいる競技でもあった。そこで、福祉教育の一環として小学生と障害者施設、障害のある人との交流の手段としてボッチャが取り上げられ、交流が計画された。

また、ボッチャの指導は、社協の中にある障害者支援事業所である中土佐町地域活動支援センター「つどい処」の『ワンチーム』メンバーのボッチャ経験者の方が行った。障害のある人を含むメンバー（当日参加 10 名程）からルールを説明してもらい、一緒にゲームを体験し、その後質問タイムによる交流も行った。子どもたちに教えるということで『ワンチーム』メンバーにとっても特技を生かせる活躍の場にもなっている。

小学校ではこの他、高齢者施設訪問や独居老人訪問、高齢者とのふれあい活動などによる交流も実施している（ここではボッチャはしていない）。

このプログラムは、小学校、特に担任の教諭、社会福祉協議会、地域コーディネーター、障害者施設関係者の連携により、実現したと言える。

ボッチャボールを使った交流プログラムは、小学校の体育館で実施した。

小学校としては3・4年生の総合的な学習の中で、「地域の人を知ろう、触れ合おう」というテーマのもと学習をしたこと、国語の時間に 3 年生がパラリンピックのことについて学習したことも動機づけとなった。

現在は児童が日常的にボッチャをできる状態にはなっていない。今年度は体験活動以降も休み時間や全校レクリエーション等で活用できる環境を整えたい。

今後の予定としては、ストックヤード（就労施設）の見学を11月の終わりに実施する。その中の交流等でボッチャをやる予定。

【効果や子どもたちの変化】

ボッチャは、誰もが楽しめるスポーツであることを知ったことにより、雨の日の休み時間では、中学年(3・4 年生)を中心にボッチャで楽しむ姿が時々見られるようになった。

ボッチャを使っての交流までは「障害のある人は大変」というイメージが強かったが、交流を通して、障害のある人の得意な事や、障害のある人の実際のくらしの様子、障害にもいろんな現れ方があること等を知り、障害者のことに関して広がりが持って理解することができた。その結果もっと勉強したいと考えるようになった子どももいた。

ボッチャが、みんなが楽しめるスポーツであることを知ると同時に、いろんな人が一緒にスポーツができるということを知った。

【ボッチャのいいところ】

年齢や障害の有無に関係なく、誰もが楽しめるスポーツであることがわかった。

障害のある方が、自分の身体や体調に合わせながらスポーツを楽しんでいる様子を知ることができた。

児童が障害について、かわいそう、大変そう、というマイナスのイメージだけでなく、面白い、投げるのが上手、 教えてもらえる、といったプラスのイメージを持つことができた。

目で見える障害だけでなく、様々な障害について教えてもらうことができ、障害についてさらに学びたいという思いを持つことができた。

ボッチャ体験での出会いが、 以降の学習(障害者就労施設見学、 国語科の学習、総合的な時間の学習等)につながった。

地域の交流の手段となり、教員の学びの助けにもなった。

【今後の取り組みにつて】

社協と連携した地域交流の中でボッチャを今年もやる予定。

ボッチャを習った上級学年が下学年に教えるような場面が設定できるかもしれない。

その後、ボッチャボールをもう1セット買った。これを使えるような条件を設定したい。

月に1～2 回実施している全校レクリエーションの時間でもボッチャを使えるかもしれないと考えている。

【学校を訪問しての感想】

海に近い高台に学校があり、なんとも心洗われる気持ちになった。

小規模校ということで、先生と子どもの関係が近く親しく、とても親密でよい関係が作られているように感じた。

先生方も子ども一人一人にしっかりと向き合っていることが実感できた。

町ぐるみで子どもの教育、高齢者のこと、障害のある人のことを連携して進めている印象を持った。小さい町だからこそできるメリットだと感じた。

お忙しい中、長い時間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。　（藤田紀昭）

お話を伺った上ノ加江小学校の角校長先生（左）、堅田教頭先生（右）

3･4 年生の皆さん。パラリンピックについて調べた発表資料を見せてくれました。

わかりやすくボッチャルールの説明をしていただきました。「ルールは簡単だね」

ボッチャ交流で、児童にとっては障害に対するイメージが変化。教える側も楽しい活躍の場に。

一緒にゲームを体験したあとは、質問タイムによる交流を行いました。